

学力向上・社会意識の醸成

基礎学力を定着させ、  
社会への関心を育む指導で、  
生徒の進路意識を高める。

変革のステップ

背景と課題

- 学力に課題がある生徒や、進路選択において積極的に自己実現を図ろうとしない生徒が目立った

実践内容

- **朝学習における学び直しの徹底** 朝学習に全校で統一した指導方針を設け、学び直しの専用教材を活用しながら、基礎学力の定着を図る
- **「総合的な学習の時間」のカリキュラムの刷新** 生徒の社会への関心を高めようと、進路学習が中心だった「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）のカリキュラムを、地域や国際社会の課題をテーマにした探究学習を主軸とするものに改めた
- **研究企画部の新設** さらなる指導改善を図れるよう、校内研修を企画・推進する専門部署を新設。ICTを活用したアクティブ・ラーニングの推進を始めとする以前からの取り組みと、総合学習での取り組みの強化を図った

成果と展望

- 多くの生徒に学力の伸びが見られる
- 自分のやりたいことを見つけ、積極的に挑戦する生徒が増加

**学力と社会への意識を高め、  
生徒の主体的な自己実現を支援**

100年近い歴史を持つ宮城県涌谷高校は、同県中北部に位置する遠田郡内唯一の共学の普通科高校だ。生徒の多様な希望進路の実現に出来る学校として、地域の信頼を得ている。

生徒は明るく素直だが、学力には課題があった。例えば、基礎的な内容でつまずくと、それ以降の学習に前向きになれない生徒が見られた。生徒の学習意欲を高めるため、課外学習を実施したが、組織的な制度として定着してこなかった。学年やクラス単位の取り組みにとどまっていたこともあり、継続させることが難しく、思うような成果が得られていなかった。ま

PROFILE



宮城県遠田郡立涌谷実科高等女学校として開校。校訓に「質実・謙譲・自律」「勤敏・優雅・協同」を掲げる。ボランティア活動に力を入れ、2014年度には「キャリア教育優良学校文部科学大臣表彰」を受けた。

設立 1919(大正8)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約130人

2018年度進路実績(現役のみ) 私立大は、東北学院大、東北生活文化大、東北福祉大、宮城学院女子大、国士館大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学41人。就職74人。

住所 〒987-0121 宮城県遠田郡涌谷町涌谷字八方谷3-1

電話 0229-42-3331

Web site <http://wakuya-h.blogspot.com>

た、進学・就職先を安易な理由で決めてしまうなど、進路選択に消極的な生徒も少なくなかったという。そこで、2017年度、全校を挙げて指導改善に着手した。その推進者の1人である研究企画部の三浦学先生は、次のように語る。

「学力を高めれば、より多くの選択肢の中から進路を決めることができます。また、本  
当に進みたい道を見つけられるよう、社会への視野を広げてほしいという思いもありました。そこで、学力の基礎・基本を固めるとともに、主体的な進路選択に向け、社会への関心を高められるよう、取り組みを充実させようと考えました」



宮城県涌谷高校  
**三浦学** みつら・まなぶ

教職歴18年。同校に赴任して4年目。研究企画部。地理歴史・公民科担当。「SDGsの理念に共感し、生徒の未来を変える教育を目指す」



宮城県涌谷高校  
**鈴木雅也** すずき・まさや

教職歴11年。同校に赴任して3年目。研究企画部。英語科担当。「聞き上手であれ」「一生勉強」をモットーに生徒と接していきたい」



宮城県涌谷高校  
**高橋唯** たかはし・ゆい

教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路指導部。理科担当(化学)。「現状不満足」の精神で、生徒のさらなる成長を支えていきたい」



宮城県涌谷高校  
**大久千賀子** だいきゅう・ちかこ

教職歴1年。同校に赴任して2年目。研究企画部。音楽科担当。「常に生徒に寄り添い、生徒とともに成長できる教師でありたい」

## 全校体制での学び直しにより、 学習に自信をつける生徒たち

基礎学力の定着に向け、毎日の始業前に行っている10分間の朝学習で取り組む国語・数学・英語の問題を見直した。以前は教科団が作成した問題を用いていたが、生徒一人ひとりの学力に応じた作問が難しかったため、ベネッセの「マナトレ」(\*1)を導入。1・2年次で基礎編、3年次で標準編に取り組ませることにした。1回の朝学習でマナトレのプリントに1枚以上取り組み、自己採点を行うという全学年共通の方針を設けたが、それ以外の方針については、担任や学年団が自由に決めることにした。例えば、教科を毎日替える学年がある一方、同じ教科を1週間続ける学年もあるなど、生徒の実態に応じて工夫している。また、週末課題として、マナトレのプリントを出す学年もある。

1学年担任の大久千賀子先生は、こう述べる。「私のクラスでは、朝学習の時間に解ききれなかったプリントは、その日の放課後までに解いて提出するよう指導しています。毎日コツコツと継続して取り組む習慣をしっかりと身につけることができれば、これからの3年間の伸びが大きくはなりません。また、生徒の答案をチェックしていると、どの生徒がどこでつまづいているのかが分かり、生徒把握にも役立っています」

定期考査では、各教科・科目10点分、マナ

レと同じ問題を出すことで、朝学習への意欲の向上を図っている。また、学習内容の定着に向け、マナトレの問題を抜粋して作成したテストを定期的実施。基準に満たなかった生徒には、補習を行ったり、宿題を出したりしている。研究企画部の鈴木雅也先生は、担当する英語について、朝学習による生徒の変化をこう語る。

「以前は、定期考査ではよくできていても、模擬試験になると、初見の問題に焦ってしまうのか、動詞に三人称単数現在のsをつけ忘れたり、現在形と過去形を混同して解答したりするといった不注意ミスをする生徒が少なくありませんでした。しかし今では、模擬試験にも落ち着いて取り組み、しっかりと結果を残せる生徒が目立つようになりました。マナトレを活用した学び直しを続ける中で、『分かるようになった』という実感を得ることができ、それが自信となっているようです」

## 生徒の視野を広げられるよう、 幅広いテーマでの探究学習を推進

生徒に社会への関心を醸成する取り組みとしては、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の改善を進めている。以前は、職業や志望校を調べたり、志望理由書やエントリーシートの書き方などを学んだりする進路学習が中心だったが、17年度1年次からは、課題の発見や問題の解決を図る探究学習に力を入れることにした。地域の課題から国際的な課題へと、探究する

\*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント。  
\*2 ベネッセの小論文・表現学習教材。表現力の向上・社会で生きるコミュニケーション力の育成を促進する教材。

図1

1年次の「総合的な学習の時間」の取り組み(例)

テーマ	内容
自他理解	地域の人を始めとする「身近な人」へのインタビューを通して、職業観を養う。事前学習として、「表現サポート」を参照しながら質問項目をグループでまとめる。
ベーシックスキルの習得	涌谷町の魅力をグループで話し合い、ブレインストーミングやKJ法を用いてメンバーの発言を整理・集約。
職業と私	グループで地域の企業などを訪問し、職業についてのインタビュー調査を行う。その結果や感想などについてメンバー同士で話し合いを重ね、地域の仕事の課題をまとめたポスターを作成。クラスで発表する。
	涌谷町役場の職員の講話を聞き、地域の課題について考える。

ブレインストーミングやKJ法は、思考力の基礎となる「ベーシックスキル」として位置づけ、しっかり育成できるようグループワークを充実させている。また、地域でのフィールドワークに力を入れ、職場研究などに取り組む。

\*学校資料を基に編集部で作成

テーマを段階的に広げていき、多様な視野から進路を考えられるようになることを目指している。次期学習指導要領への対応を進めるべく、思考力・判断力・表現力の育成につながる取り組みを増やそうというねらいもあった。

1年次には、地域への理解を深めることを目標として設定し、次のような流れで取り組みを進めた(図1)。まず1学期には、涌谷町の魅

力を探るグループ学習を行い、町をよりよくするための方法を話し合った。メンバー各自の発言内容の整理には、ブレインストーミングやKJ法を用いたが、そうしたスキルの習得には、ベネッセの「表現サポート」(P.33\*2)などを活用した。2学期には、職場探究として、同町の役場や企業を訪問し、職業についてのインタビュー調査を実施。各グループは、その内容をポスターにまとめ、発表した。そして、3学期には、町役場の職員による講話などから、地域の課題について考えを深めた。

取り組みを通して、地域の新たな魅力に気づいたり、人口減少の切実さを実感したりする中で、次第に地域への関心を高めていき、どのグループでも、率先して行動するメンバーが目立つようになった。一方、課題もあるという。

「総合学習」では、正解やよい意見を出すことよりも、テーマに対して頭を働かせて考えたのが大切になります。そうした意図が浸透せず、『答えが分からない』と言って手を止めてしまったり、評価を気にして優等生的な考えを述べたりする生徒もいます。結果よりも考えるプロセスが大切であるということ、しっかり伝えられるよう指導を工夫したいと考えています。(大久先生)

### 社会の出来事を自分事化するために、「SDGs」を活用

2・3年次の総合学習では、自分と世界のつ

ながりに目を向けられるよう、国連が掲げる「持続可能な開発目標(以下、SDGs)」(\*3)を意識した取り組みを充実させていきたいと考えている。その一環として、18年度3年次の1学期には、「こども国連環境会議推進協会(以下、JUNEC)」(\*4)の講師を招き、SDGsのワークショップを行った。3学年担任の高橋唯先生は、次のように述べる。

「推薦入試の志望理由書の内容を充実させるために何をすべきか、ベネッセの研修会で相談したところ、社会の課題と自身の将来を結びつけて考える視野を育むことが重要だと学びました。そうした折、JUNECの研修に参加し、私自身もSDGsについて理解を深めました。これなら生徒が当事者意識を持って社会と進路を結びつけられるだろうと考え、ワークショップを企画しました」

ワークショップで生徒が強い刺激を受けていたのが、SDGsのカードゲームだ。それは、教室を地球に見立てて、生徒一人ひとりが1国の代表として、互いに協力しながら、経済・環境・社会といった分野ごとに様々なプロジェクトを行い、自国の発展を目指すというもの。例えば、収益性を優先する政策ばかりに力を入れると、経済的には豊かになる半面、環境破壊が進むといった、社会変化を仮想体験できる。

「複数の要因の相互作用によって社会が変わっていくことを、生徒は実感したようです。社会の課題を自分事として捉え、自分は何が

\*3 「Sustainable Development Goals」の略称。2015年9月の国連総会で採択された、環境保全や経済格差の解消といった17の国際目標であり、「誰一人取り残さない」というスローガンの下、30年までの達成を目指している。

\*4 国際連合大学(国連大学)と連携し、持続可能な社会を実現する人材を育成するために設立されたNGO。国連大学とは、日本に本部を置く唯一の国連機関。



したいのか、何ができるのか、考えを深めるきっかけになったと思います」（高橋先生）  
 そうして高まった生徒の社会意識をさらに伸ばせるよう、ワークショップ後には、自分の担当する授業で国際問題を取り上げる教師が増えている。例えば、三浦先生が担当する地理歴史の授業では、民族紛争や貧困といった課題について問いかけ、必要な支援のあり方について生徒が考える場を設けた。

### 教師間の連携の強化を目指し、指導改善の中心を担う部署を新設

同校は、15年度、宮城県の「ICT活用授業力向上プロジェクト事業」に指定されたことをきっかけに、全学年でICTを活用したアクティブ・ラーニング（以下、AL）に力を入れるようになった。同県の教育長や学校関係者らを招き公開授業も盛んに行っている。

17年度からは、ICTを活用したALの取り組み、総合学習の取り組み、校内研修を3本柱として位置づけ、組織再編を行った。教務部や進路指導部といった各分掌が縦割りで指導改善に取り組むことが多かった体制を変え、教師間の連携を強化したいと考えた。そこで、各分掌や各学年団を横断し、3本柱をより充実させるための部署として、「研究企画部」を新設。外部講師を招いた講習を含め、年間を通して、計画的に校内研修を行っている。

総合学習の支援も、同部の重要な役割だ。17

年度は1年目ということもあり、企画の立案を始め、指導案の作成でも中心役を担った。

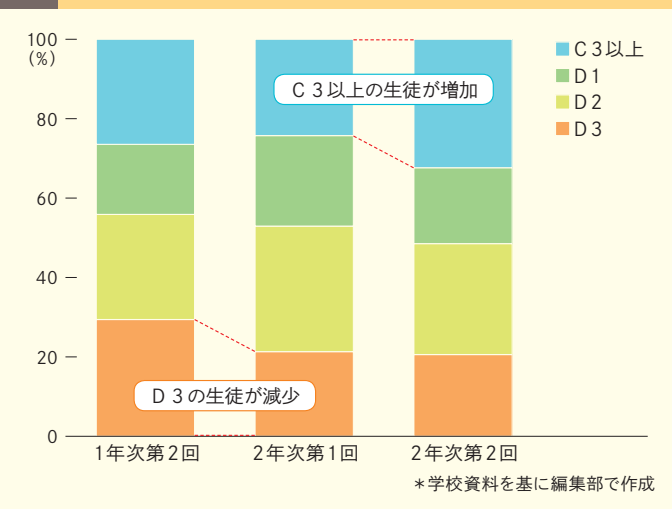
「年度当初に作成した年間計画に沿って、1週間ごとに指導案を作り、担任の先生に示しました。『表現サポート（表現トレーニン グ）』の教師用の指導書も参考に、三浦先生や担任の先生方の意見も取り入れながら、実践的な取り組みができるよう心がけました」（鈴木先生）

### 高い目標に挑戦しようとする生徒の意欲を、より高めていきたい

指導改善に着手して1年半だが、その成果は早くも実を結びつつある。マナトレに熱心に取り組む、ベネッセの「基礎力診断テスト」（\*5）のGTZ（\*6）のゾーンを上げる生徒が増え、基礎学力の着実な定着がうかがえる（図2）。また、総合学習での探究学習を通して、自分のやりたいことに目を向け、積極的にその実現をやる生徒も目立つようになった。プレゼンテーションなどでは、自分の考えを過不足なく伝えられるようになるなど、表現力の向上も著しい。

生徒のそうした成果に手応えを感じたことで、教師の意識もより高まり、率先してALに取り組む教師が増えている。18年度からは、年1回、全教師が指導案を作成し、ALの推進やICT活用をテーマとした授業公開を実施する予定だ。今後は、文部科学省の留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN」日本代表プログラム

図2 「基礎力診断テスト」のGTZの推移（2016年度入学生）



高校生コース」や大学の体験プロジェクトなどに参加しようとする意欲を醸成できるよう、指導のさらなる充実を目指す。

一方、課題もあると三浦先生は語る。「一つひとつの取り組みから効果が表れ、生徒の対話力や表現力、主体性が向上しているのを感じます。その反面、取り組み相互のつながりが浅く、今行っていることが次にどのように生かされるのか、教師・生徒ともに見えていない部分があります。今後は外部の協力も得ながら、生徒の探究心を刺激し、資質・能力を高めるようなプログラムを構築していきたいと思っています」

\*5 ベネッセの教材「進路マップ」の1つ。GTZ（学習到達ゾーン）という指標で、生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、生活・学習指導用テスト。 \*6 ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」の11段階で評価される。